

# 1月号 病虫害防除

佐賀県果樹試験場病虫害研究担当 池田亜紀

昨年は、春先から梅雨前までの少雨・高温により、カンキツではミカンハダニの発生が多い園がありました。また、カンキツの黒点病やブドウの黒とう病の発生が一部の園で多かったです。さらに、台風等の強風により、かいよう病が温州ミカンでも認められました。

冬期は、これら病虫害の伝染源（増殖源）を圃場内から除去する重要な時期となりますので、しっかり防除対策に取り組みましょう。

## 【果樹全般】

(伝染源の除去)

昨年発生した病害の病原菌が枯れ枝や落葉等に残っており、そのままにしておくと、これらが伝染源となって春先からふたたび病気が広がり、大きな被害を引き起こす恐れがあります。下表に示すような伝染源が園内にたくさん残っている場合は、生育期間中に薬剤防除を行っても効果はあがりません。

作物名	病名	伝染源
カンキツ	黒点病	枯れ枝、園内に放置されたせん定枝・切り株
	かいよう病	枝・葉の病斑
ナシ	輪紋病	枝幹部の病斑
	葉炭そ病	落葉
	黒星病	
ブドウ	べと病	落葉
	褐斑病	落葉、粗皮
	黒とう病	枝・巻きひげの病斑
カキ	炭そ病	枝の病斑

そのため、カンキツでは、被害枝・葉の除去、せん定くずを園外へ持ち出すなどの処分を行います。切り株は黒点病の伝染源となるため、可能な限り除去して下さい。困難な場合には、菌が飛散しないよう切り株に肥料袋などを被せます。

落葉果樹では、被害枝の除去、せん定くずを園外へ持ち出すなどの処分に加え、落葉処理や粗皮削り、ブドウの巻きひげ除去を行って園内にある伝染源を減らします。



写真1 トラクターを使用した落葉の土中への鋤き込み



写真2 肥料袋で覆ったカンキツの切り株

#### (防風樹の手入れ)

防風樹の手入れを怠り通風が悪くなると、園内の湿度が高まり、病害が発生しやすくなります。防風樹は適切な刈り込みを行い、園内の通風を改善しましょう。

ヒノキ・スギが防風樹の場合は、果樹カメムシ類の増殖源となる毬果が結実しないように刈り込みます。作物の管理が忙しくなると防風樹まで手が回らなくなるので、今のうちに必ず行います。

#### 【露地カンキツ】

##### (貯蔵中の果実腐敗対策の徹底)

貯蔵中はこまめに果実の状態を点検し、腐敗果を見つけたらすぐに取り除きます。また、取り除いた果実は貯蔵庫内に放置せず必ず持ち出し、土中に埋めるなどして処分します。今年度産は、8月上旬までの高温乾燥と8月中旬以降の長雨による果実体質の弱体化、さらに台風等の強風による傷果が多くなっている恐れがあります。しっかりチェックし、腐敗果の発生を少なくしましょう。

今月から中晩柑の収穫が始まります。収穫の際は果実に傷がつかないように、丁寧に取り扱い、腐敗果の発生を防止しましょう。また、日焼け果も収穫物に混入させないように注意します。

##### (カイガラムシ類・ミカンハダニ対策にマシン油乳剤の散布)

冬期のマシン油乳剤散布は、ヤノネカイガラムシやフジコナカイガラムシ等のカイガラムシ類に対し効果が高く、加えてミカンハダニも防除できます。本格的な寒さが到来する前の1月上旬までにマシン油乳剤97% 60倍を散布して下さい。ただし、厳寒期の散布は落葉の発生を助長させる恐れがありますので、1月上旬までに散布できなかった場合はせん定終了後の3月上旬にマシン油乳剤97%を80倍で散布します。

カイガラムシ類は枝葉や樹皮の割れ目など、ミカンハダニは葉裏で越冬します。そのため、薬剤散布の際には、主幹部や葉裏、枝葉の込み合った部分などまで薬液が十分かかるよう、ノズルを樹冠内部に入れるなどして丁寧に散布します。

なお、樹勢が低下している樹へのマシン油乳剤の散布は控え、生育期の殺虫剤で対応して下さい。効果の高い冬期のマシン油乳剤の散布ができるように、日ごろより適正な「肥培管理」、「着果管理」等の基本管理を徹底し、樹勢の改善、健全な樹勢の維持に努めてください。

#### 【ハウスミカン】

##### (ミカンハダニ対策)

ハウス栽培ではミカンハダニが増えやすく、一度増殖してしまうと抑えることは困難となります。そのため、ビニル被覆以降は、発生しやすい場所を中心に日ごろからよく観察し、発生が認められたら直ちに防除を行きましょう。

また、ハウス栽培ではミカンハダニの殺ダニ剤に対する感受性の低下が問題となっています。殺ダニ剤の使用回数を減らすため、幼果期(果径25mm頃)にマシン油乳剤97% 200倍を単用散布します。

ただし、生理落果を助長するなどの問題が起こらないよう、マシン油乳剤の散布は天気の良い午前中に行うことや散布後は換気等を行い樹体の乾燥を促すこと、樹勢の低下している樹には散布しないこと等を心掛けて下さい。

#### (灰色かび病対策)

落弁期にナリア WDG 2,000 倍等の殺菌剤にトルキヤップ 1,000 倍を加用して散布します。灰色かび病は落弁期の花弁に発生するため、こまめに枝を揺するなどして花弁を除去し、本病の発生を減らしましょう。また、湿度が高いと灰色かび病が多発するため、循環扇等を使用して湿度を下げます。

### 【ナシ】

#### (白紋羽病対策)

発病樹とその周辺の未発病樹に対し、フロンスайдSC 500 倍(発病樹)と 1,000 倍(未発病樹)のかん注処理を行います。1 樹あたりの処理量は、100Lを目安とし、ムラなくたっぷり処理しましょう。

本処理の効果は 2 年程度持続します。それ以降は再発する場合もあるため、根部を掘り発病が進んでいないかチェックし、発病が進んでいるようであれば再び処理して下さい。

#### (粗皮削り)

粗皮削りは、カイガラムシ類やシンクイムシ類などの粗皮下で越冬する虫に対して有効です。ただし、フタモンマダラメイガが発生している園では、形成層近くまで削ってしまうと、柔らかいカルスが形成され、そのカルスが後々被害を受けることになるので、削り過ぎないように注意して下さい。

### 【キウイフルーツ】

#### (かいよう病対策)

かいよう病は冬期の対策が非常に重要です。かいよう病の発病の有無にかかわらず、IC ボルドー66D 50 倍等の銅剤を用いて防除を行います。特にせん定等の樹体に傷がつくような作業をした後は必ず切り口にトップジン M ペーストを塗布するとともに銅剤による防除を実施します。

せん定等の作業は、①本病が発生していない園、発生していない樹から始め、②使用するはさみやノコは樹ごとに 70% 以上のエタノールまたは 0.02% 以上の次亜塩素酸ナトリウム水溶液で消毒します。

枝や幹からかいよう病によると思われる白色～赤褐色の樹液の漏出がある場合は、発見次第早急に切除して下さい。かいよう病に対する抵抗性は、品種ごとに差があり、被害切除部位についても、樹ごと、枝ごとに異なるため、指導機関等に相談して検査を行うようにしてください。かいよう病に対する抵抗性がやや強い「ヘイワード」では、樹液漏出が見られる場合には、樹液漏出箇所から褐変が見られなくなる位置まで遡って枝を切除します。



写真3 赤褐色の樹液の漏出

なお、切除した枝は園内に放置せず、土中に埋めるなど適切に処分して下さい。

(クワシロカイガラムシ対策)

クワシロカイガラムシの発生が多い園があります。マシン油乳剤 95% 14 倍を散布して下さい。ただし、マシン油乳剤の散布を行う場合は、かいよう病対策のための銅剤散布との間隔を 2 週間以上開けてください。

**【カキ】**

(フジコナカイガラムシ対策)

昨年フジコナカイガラムシの発生が多かった園は、越冬量も多いと考えられます。本虫は粗皮下などのすきまで越冬するため、粗皮削りを行って越冬量を減らします。

また、地際部の粗皮下でも越冬しているので、この部分まで丁寧に粗皮削りをして下さい。

---

昨年の病害虫の発生状況を思い出して、まずは、何から始めるべきか、どの園からとりかかるべきか等をしっかり計画して、作業に臨みましょう。